勘九郎はそういって、国繁の怒りをしずめた。
「北条は度量がない。それがよくわかった。いずれどこからも意のままにさせぬ強い上野国をつくってみせる」
と国繁はいったが、それは父成繁が生涯を賭けて果たせなかった夢である。
それから十日もたたないうちに、小田原から山上顕将が金山城にきた。年賀のあいさつがすむと、山上顕将は北条氏直の口上を国繁に伝えた。年賀をかねて、軍法配立のことについて相談したいので、足利の長尾顕長とともに、山上顕将に同道して小田原に参上せよというのである。
軍法配立というのは、いくさの備えや軍勢の配置のことである。
主君織田信長を本能寺で殺した明智光秀を討ったのは羽柴秀吉である。その秀吉が信長亡きあと、天下取りを進めている。対立する柴田勝家を北の庄に滅ぼし、十数万の軍勢を動かす勢力にのしあがっている。秀吉の天下統一の矛先が、いずれこの関東にもおよんでくる。
それに備えて、あらかじめ軍法配立の相談をしておきたいということであるにちがいないが、それならば、弟の顕長まで参上させることはない。国繁一人でことは足りる。なにか魂胆があるのか、という疑いが国繁の脳裏をかすめた。
父成繁の遺誡に、隣国の国主列侯より招かれたときは、兄弟そろって赴いてはならぬという用心深い一条がある。
「使者の口上、承知した。ただし顕長の参上はかなわぬかもしれぬ。かぜをひいて、病床にふせっ

ていると聞いている」
国繁は口実をつくった。
「おそれながら申しあげます。そのことならご心配はございませぬ。ご舎弟長尾顕長さまはすでに本復されております」
山上顕将は国繁に調子をあわせて、かぜをひいてもいない顕長が本復しているとさりげなくいった。
国繁の肚のうちを読んでいるようだ。
「先に足利へまいられたのか」
国繁はいくぶん咎める口調になった。
「ご舎弟どのの足利へ先にまいるなどもってのほかでございます。そのような無礼なことはいたしませぬ。足利には別に使者を立てました。ご城下で、その者の報告を聞いたのでございます」
山上顕将は平然といいわけをした。
油断のならぬ奸物め、と国繁は歯ぎしりするような気持で思ったが、
「それは足利へ使いを出す手間がはぶけて結構だ」
と平静を装った。
出発の日取りを明後日と決めて、山上顕将は宿所の金龍寺にはいった。
国繁は家臣を集めて、小田原に参上することを伝えた。供の人数を決め、小金井四郎左衛門に供

頭を命じた。
　鳥山浄仙が額にしわを寄せて考えこんでいる。
「浄仙、なにかいうことがあるのか。遠慮なく申せ」
「軍法配立の相談というのが、腑に落ちませぬ」
「口実だというのか」
「軍法配立は、北条一族で取りしきるはずです。なにゆえ外様のわが殿を呼び寄せて相談するのか、合点がまいりませぬ」
「それは、東上野の備えを相談したいのであろう」
「ご舎弟顕長さまで参上せよというのも気がかりです」
「北条が、この国繁に害を加えるとでもいうのか」
「まさか、そこまでは」
　と浄仙は口ごもった。
　国繁もいくぶん疑いは感じているが、いったん承知した小田原参上をくつがえすことはできない。
「みなの者も案ずるな。北条はわれらを頼りにしているのだ」
　国繁は家臣たちにいったが、それは自分にいい聞かせたのでもあった。
　国繁は席を立つと、その足で妙印尼を訪ねた。
　妙印尼は脇息にもたれていたが、

「母上、国繁です」
という声を開くと、脇息から肘を離して背筋をのばした。
国繁は北条氏直の招きを受けて、弟の顕長ともども小田原に参上することを妙印尼に告げた。
「国繁ひとり参上するつもりでしたが、山上顕将という人物、聞きしにまさる奸智にたけたやつで、この国繁の肚を見ぬいていたのか、見事に先手を打たれました。父上の戒めに背くことになりますが、まさか北条に理不尽なたくらみがあるとも思えませぬ。安心して国繁の帰りをお待ちください」
「わかりました」
と妙印尼はいったが、いまは乱世、なにが起るかわからない。
国繁の身になにが起ったとしても貞繁がいる。妙印尼はその心づもりをして国繁を送り出した。

由良国繁は小田原に着くと、弟の長尾顕長とともに、いったん城下の寺にはいった。その寺で身仕度をととのえ、北条の家臣に案内されて登城した。天正十二年一月二十九日のことである。
対面したのは北条氏政の弟、氏直の叔父て、鉢形城主北条氏邦であった。
氏邦は着座するなり、まるで罪人を裁く口調で氏直の口上を伝えた。
「由良国繁、長尾顕長、両名とも諸事不届きにより、じきじき申し開きを聞くため、しばらく小田原城に留めおく。さよう心得よ」

氏邦はそれだけいうと、さっと立ちあがった。
「待たれよ。われらは軍法配立の相談にあずかるため参上した。なにゆえ諸事不届きの咎めを受けねばならぬのか、合点がいかぬ」
やはりはかりごとであったか、とほぞを噛む思いで国繁は抗議した。
氏邦は一瞬足をとめたが、振りむきもせず出ていった。
「卑劣きわまる北条め、われらを罠にはめたな。兄上、斬りひらいて、脱出しますぞ」
顕長は怒りで声が震えている。
斬りひらくといっても、武器は脇差しだけである。
「落ちつけ。脱出することなどできぬ。うろたえて名を汚すな」
と国繁はいったが、顔がひきつっている。
城士がどかどかと音を立ててはいってきた。
「ご案内いたします」
組頭が軽く頭をさげていった。
国繁と顕長は二の丸の二間つづきの座敷に監禁された。
「ご用がございましたら、なんなりと申しつけてください。手の者がいつでも外にひかえております」
組頭は丁重にいったがこれは監視の武士がいつでも眼を光らせているということでもある。

「たずねたいことがある。城下の寺にいる供の者どものことだが、いかなるあつかいを受けているか」
「それはわれらのあずかり知らぬことです」
と監視の組頭はいったが、その時刻、供頭の小金井四郎左衛門は北条の家臣から、
「そのほうどもの主人はしばらく逗留するゆえ、供の者どもをしたがえて早々に城下を立ち去れ」
という氏直の命令を告げられていた。
邪魔者を追い出すような、威丈高な態度であった。
「逗留というが、監禁されたのだ、殿を奪われた、と小金井四郎左衛門は感じ取って血が逆流したが、供頭が逆上していては対応を誤る。
「殿が逗留するのであれば、われらもとどまります。城下を立ち去れとは、いかなることか、うけたまわりたい」
四郎左衛門は落ちついて抗弁したつもりだが、顔が青ざめ、膝のうえのこぶしがふるえていた。
「無礼者め。氏直公の命令であるぞ。即刻、城下を立ち去れ」
といいすてて、北条の家臣は出ていった。
隣室で聞いていた者たちが騒ぎ出した。四郎左衛門は激昂する者たちをしずめて座敷にもどり、この事態にどう対処すべきか、苦悩していた。すると、寺を駆け出していく物音がした。
「なにごとだ」